

Cloning: what now?

ヒトクローン研究の最前線 さて、どうしよう？

今年1月、韓国ソウル大学の調査委員会は、クローン研究者 Woo Suk Hwang (黄禹錫) 率いる研究チームが比較的容易にヒトクローン胚 (体細胞核移植胚) を作り、そこから胚性幹細胞 (ES 細胞) を作製したとする研究成果はねつ造であったとの調査結果を発表した。

このニュースを受け、ヒトクローン研究は振り出しに戻ることを余儀なくされた。この特集では、生物学者たちが今、どのように立て直しを図っているかをみていく。最初の記事 (p.8) では、卵子 (卵ともいう) の供給量

が大きく限られた中で研究者たちがどのようにクローン作製研究に取り組んでいるかを Carina Dennis が報告する。次に Phyllida Brown が、もし免疫の問題を解決し、移植臓器に対する人体の抵抗 (拒絶反応) を止めることが可能であるならば、治療目的のヒトクローン胚作製は本当に必要なかを検討する (p.12)。Business では、Hwang の最大のライバルだった1人が、ヒトクローン作製をこれ以上続けられない可能性を口にしていく (p.16)。

UPI/NEWSCOM

